

牧師所感： 老人牧師の若き日の回想

旧約聖書の箴言五章を読む内に 特に 21 節のみことばが目に止まった。21 節のみことばは「人の歩む道は主の御目の前にある。その道を主はすべて計っておられる」

私は大学卒業後、大志を抱いて、声楽の勉強の為に日本で名の通っている国立音楽大学へ仮留学生として来日した。しかし 本当の留学生になる為には、4月 6 日（1966 年）に正式の試験を受けねばならなかった。ところが志が変って、上野にある 東京音楽大学へ足を運び、当時 韓国音楽大学で名が知られている有名なバリトンの声楽教授 中山 恰一先生を訪問し、入学の為に来たことを告げた。先生は私の訪問を聞き、即座にピアノに向かい課題の歌を歌えと命令するのであった。私はヴェルディ作曲のラ・トラヴィアータ（椿姫）の歌曲ゼルモンの歌を独唱した。歌った後 30 分 待たされた。30 分後 先生は「申さん、 2 年生に入れてあげよう」とおっしゃった。私はキヨトンとして「先生、私は韓国で大学を卒業しております」「私も大学院の試験を受けるようにして下さい」と懇願した。すると先生は、「申さん、大学院は無理です。なぜかと言うと、うちの大学院に 6 名が学部から志願しているし、大阪、その他の地方からも志願しているので、あなたは日本に入国して間もないし、黙って 2 年生に入りなさい。あなたはとても無理です」と言って諭された。でも 私は先生の提案を受け入れず、応試して見事に落ちた。その後、私は神の配慮により、国立音大から東京神学大学へと転校して、牧師となったのである。さて、牧師として晩年を迎え、死を前にして思うことは「人の歩む道は主の御目の前にある。その道を主はすべて計っておられる」ということ。ところで 齡 92 の年を生きる私は、今も主が私の人生を計っておられることを痛感している。

おわりに、神に栄光がありますように 祈ります！！